

百周年記念誌

『くすの木』より

(1939年～1945年)

「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」 校舎内に忠霊室を設置。

国家の総力をあげての戦争にもかかわらず打開の道は見出せなかった。川中出身者でも、戦争が始まってから三八年十二月までで二三名の戦死者を数えた。方向を失った近衛内閣は三九年一月に総辞職する。そして支配層は新たな戦争体制を模索し始めた。その対象は「銃後」を守る国民、特に中学生以上の青少年である。

一九三九年五月二十二日、「青少年学徒

青少年学徒ニ賜ハリタル勅語

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極ノテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繁リテ汝等青少年学徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尙ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長シ執ル所中ヲ失ハズ擲フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムト期セヨ

昭和十四年五月二十二日

ニ賜ハリタル勅語」が渙発された。この日は陸軍現役将校配属令十五周年にあたり、宮城前広場にて親閲が行われ、全国の学生生徒の代表三万五〇〇〇人が参加。川中からは校長他教諭二名と代表生徒一〇名が参加した。同時刻、川中の校庭には全校生徒が参集して宮城遙拜。氷川神社に参拝した。

この勅語は翌二十三日、学校にて奉読された。八月十六日には勅語の贈本を拝受し、二学期の始まる九月一日に拝受式が行われた。この日から毎月一日は「興亜奉公日」と定められ、国民に神社参拝、一汁一菜、禁酒禁煙、勤勞奉仕が義務付けられた。この勅語には文部省の訓令による解説がある。学生生徒に対して、時局の要請にこたえて勉学や修養だけでなく、「奉公ノ誠ヲ効スルノ覚悟」を固め、用意せよ、と説く。やがて始まる学徒勤勞動員の權威付けだとも



陸軍現役将校配属令15周年記念の親閲での分列式の様子。先頭左端が川中の校旗

- 4・10(月)四年、関西修学旅行へ出発
- 5・1(月)五年、習志野廠宮演習
- 6(土)古城嶽風氏講演ならびに朗吟
- 8(月)心身鍛練遠足(川越(寄居)
- 20(土)東金子村茶摘勤勞奉仕(8日間)
- 22(月)陸軍現役将校配属令公布十五周年、宮城前にて親閲
- 23(火)「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」奉読、謹話
- 25(木)寺西海軍中佐講演
- 27(土)海軍記念日、海軍大佐講演
一万リマソン競走
- 6・10(土)映画「綴方教室」見学
- 22(木)六ヶの団体無言行軍
- 28(水)陸海軍志願者模試
- 7・7(金)支那事変二周年、市内中等学校
連合精神昂揚式、忠霊室鎮座祭
- 21(金)夏季鍛練期間開始
- 8・11(金)「栄丘」一五号発行

日本▶ノモンハン事件。双葉山、連勝記録69でストップ。純国産機「ニッポン号」世界一周。
 世界▶フランコ、スペイン内戦終了を宣言。第2次世界大戦始まる。映画「風と共に去りぬ」封切り。

言われる。

実際この年から、勤勞奉仕が本格化する。五月二十日からの八日間、学年ごとに授業日に日を定めて、東金子村での茶摘みの勤勞奉仕が行われた。

夏休みは川越の新宿付近の道路工事や秋ヶ瀬での作業(グライダ―訓練場整備のためと思われる)。冬休みは二日間だったが、集団勤勞や砂運びの学校作業が行われた。

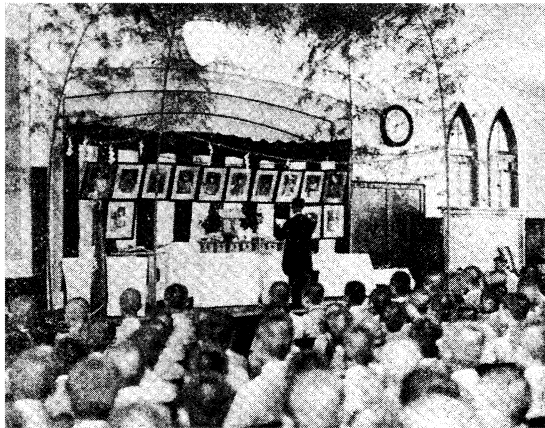
ところで、この年から夏休みが『夏季鍛練期間』、冬休みの勤勞は『冬季鍛練』と称されるようになった。そもそも勤勞奉仕は、労働力の不足を生徒を動員して補おうとする農林省や各省からの要請で始まったものであるが、一方で文部省は、勤勞奉仕を集団勤勞作業に組織して、学校を団体に基づく実践的精神教育を行う施設とすることを考えていた。『鍛練』という言葉には、その精神教育を狙う意図が込められている。七月七日の「支那事变」二周年にあたり、大正天皇行在所の隣の部屋が忠靈室とされ、神棚を設けて戦死した川中卒業生一三名が祀られた。その鎮座祭はこの日、講堂で行われた。これ以後、戦死した卒業生は忠靈室に祀られた(鈴木聞多はこの直後の七月

十日に中国で戦死、翌年祀られた)。

修学旅行については、この年から五年生では行かず、それに代わるように習志野廠舎演習が四日間にのびた。ただ、この時の五年生は四年生の時に関西に行っている。

この年も四年生が関西を旅行し、奈良では橿原神宮に立ち寄った。橿原神宮は翌年の紀元二六〇〇年記念事業として拡張工事を行っており、生徒一同、『建国奉仕隊』としてその土盛作業に参加した。

明けて一九四〇年は「紀元二六〇〇年」祝典儀式の宣伝が始まった。



戦死者13柱を祀った忠靈鎮座祭(講堂)

- 9・1(金)興亜奉公日
- 14(木)時局講演会 岡田、三上教諭
- 26(火)映画「空襲」見学
- 10・1(日)校外修養団行事実施
- 3(火)銃後後援強化週間
 「軍人援護ニ関スル勅語奉誦式」
- 7(土)所沢陸軍病院慰問(剣道部、庭球部) 五年、実包射撃
- 28(土)慰問袋發送
- 11・3(金)明治節拝賀式 第四〇回運動会
- 10(金)国民精神作興詔書奉誦式
- 14(火)「皇后ヨリ賜ハリタル令旨」奉誦
- 16(木)県下中等青年学校連合演習
- 23(木)多摩御陵を生徒代表参拝
- 29(水)教練查閲
- 12・1(金)興亜奉公日 防火デー
- 5(火)海軍少佐講演 体力章検定会
- 11(月)誓詔祭 関根書記凱旋
- 16(土)映画「土と兵隊」見学
- 26(火)集団勤勞(27日)
- 1・1(月)紀元二六〇〇年新年拝賀式
- 27(土)予餞会
- 2・3(土)弁論部校内大会
- 12(月)「紀元二六〇〇年二賜ハリタル詔勅」奉誦
- 16(金)秋山教諭凱旋
- 19(月)浅野八郎教諭凱旋
- 3・1(金)「学友会報」三五号発行
- 4(月)第三八回卒業式

入学考査の学科試験を廃止。 学校農場を開墾した。

上級学校志向の傾向は一九三〇年代になっても続き、中学校の受験競争も激しさを増していた。川中でも一九三九年の競争率は二倍を超えていた(83頁参照)。

そこで、一九四〇年度の入学考査から定員が五〇名増えて二〇〇名になった。

それと同時にこの年から全国一斉に中学校の入学考査から学科試験が除かれ、小学校からの内申書、体力テスト、面接(口頭試問)の三つが選抜基準になった。激しい入学試験の準備は児童の心身に弊害を及ぼしている、当局が考えたことによる。

入学考査は二日間にあつた。一日目は体力テストで、内容は一〇〇m走、ボール投げ、走幅跳び、懸垂、転回である。

二日目の口頭試問は三回に分けて行われた。質問内容は年度によって傾向が異なるが、例えば一九四三年の場合、第一室では

「どういう人になって国のために尽くしたか」といった皇国民としてのイデオロギー上の適格審査。第二室では大きなマレー半島の地図が吊してあり、「日本軍はどこに上陸して、どのように進軍したか」という、戦争をどれだけ把握しているかの質問。そして第三室では校長、教頭による人物考査で、出身地のことなどが聞かれた。

一九四五年には、次のような質問がなされたという。

- 一、神風特攻隊をどう思うか
 - 一、B29と艦載機について知っていること
 - 一、硫黄島について言いなさい
 - 一、大東亜の資源について述べなさい
- 三つの選抜基準のうち、体力テストが合否の結果を左右するという噂もあった。それというのも、青少年学徒の体力増強を目指して、国が標準を定めた「体力章検定」



相撲部が明治神宮大会埼玉県予選で優勝して授与された軍配と賞状

4・4(木)入学式(一年生定員二〇〇名)

5・3(金)結核予防のため武器を日光消毒

4(土)全校ホルマリン消毒

7(火)五年、習志野野廠演習(10日)

10(金)三年以下、修学旅行

15(水)鮫島海軍中佐講演

18(土)農業報国茶摘隊六〇名、高麗へ

12(水)一、二年、勤労報国隊出動

19(水)三年以上、勤労報国隊出動

7・7(日)陸軍参与官宮崎一氏講演

8(月)大楠公遺品宝物展 拝観

16(火)映画「暁に祈る」見学

21(日)夏季鍛練期間開始

9・9(月)東亜同文書院学生講演

20(金)体力章検定会

21(土)ラジオで、五年、金井長四郎

(中39)の「武蔵文化と川越」

放送

28(土)秋ヶ瀬での滑空訓練大会に参加

30(月)日独伊同盟に関する詔書奉読式

明治神宮埼玉県予選相撲部優勝

日本▶民政党齋藤隆夫、議会で軍部の日中戦争処理批判。大政翼賛会発会。東京に「贅沢は敵だ」の看板。
世界▶ドイツ軍、パリ入城。映画「チャップリンの独裁者」。フランスのラスコーで洞窟壁画発見される。

体力章検定基準

種目	初級	中級	上級
100m走	15秒	14秒	13秒
走幅跳	4 m	4.5m	5 m
手榴弾投	30m	35m	40m
運搬(50m)	40kg・15秒	50kg・15秒	60kg・15秒

なるものが、前年の一九三九年から施行されてきたからである。
左に示したのは検定の基準である。「手榴弾投」とはいかにも時局を映しているがもちろん本物ではなく、手榴弾の形をしたそれなりの重さのある物を投げた。「運搬」は俵を担いで五〇㍎走るのである。「一〇〇㍎」や「走幅跳」なら上級の基準をクリアする者もそれなりにいたが、六〇㍎の俵運搬となると、担ぎ上げるだけでも容易ではない。上級にパスする者はほとんどなく、せいぜい中級までだったという。
体力章検定は上級学校進学条件になっているわけではないが、体力増強は国家的課題となっていたから、教員からは「とにかく合格するように」と言われた。

勤労奉仕作業は一段と増えた。五月から六月にかけて、農業報国隊とか勤労報国隊が組織され、茶摘みや田植えの勤労作業に出勤している。ほかに夏季鍛練期間には東京街道の道路作業、滑空場整備作業が学年ごとに四日間ずつ割り当てられた。

また七月には、県から「生徒をして時局を認識せしめて食糧の尊さを知らしめる為報国農場を設けよ」との通牒があった。

突然の県からの通牒を受けて、川中ではさっそく土地の選定にあたり、境町の製糸工場跡地(後の川越税務署所在地)九〇〇坪を借用と決定、夏季鍛練期間の八月二日からの八日間、三年生以上の生徒が一人一日ずつの作業を課せられ、開墾した。

工場跡地なのでコンクリート土台をはがす必要があり、作業は難航した。また土地も痩せていることが予想されたが、まずは県からの指示である蕎麦を播種。後作には大麦。次いで翌年には陸稲、小麦と続いた。

*

前年に復活した相撲部が明治神宮大会の埼玉県予選で優勝。この頃は双葉山の全盛期で相撲人気が高く、プロの金華山が来校するなど、まだ少しゆとりがうかがえる。

中等学校武道大会剣道部県優勝
10・1(火)第三次東部防空訓練(6日間)

7(月)銃後奉公強化週間、正午黙禱

8(火)本県戦病死者慰霊祭(於川女に五年生が代表として参加)

校外修養団、忠霊墓参

14(月)回栗蒐集(でんぶん供出)

横田教諭心召、告別式

24(木)映画「大楠公」見学

11・3(日)明治節 第四一回運動会

4(月)遵法週間、講演 立石種一地方裁判所長、松尾慶二郎弁護士

5(火)海軍甲種飛行予科練習生募集に

関し、畠山大尉講演

10(日)市主催二六〇〇年奉祝式に参加

11(月)映画「われらの教官」見学

16(土)四、五年、県下連合演習

19(火)金華山大三郎講演、実地指導

28(木)映画「民族の祭典」見学

30(土)教練査閲

12・26(木)冬季集団勤労(27日)

1・25(土)予餞会

30(木)映画「西住戦車長伝」見学

2・2(日)県下中等学校青年団駅伝競走

8(土)セルロイド廃品回収

13(木)玉の海、佐賀の花一行相撲見学

3・4(火)第三九回卒業式

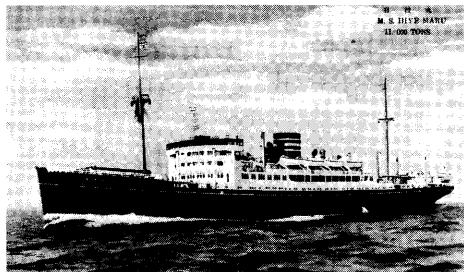
23(日)普通教室三室増築

31(月)「学友会報」三六号発行

最後の関西旅行は船で出発。 学友会が報国団に改組された。

この年入学の一年生の帽子が戦闘帽にかわるなど、戦時色はいよいよ強まった。そんな中、四月に戦前最後の関西修学旅行(四年生)が行われた。ただし期間は三日間、伊勢神宮と橿原神宮参拝を目的としたもの。しかも、往路は船を使用(横浜→神戸、二十二時間)し、途中大阪城や東大寺の見学を入れたため、とにかく忙しい日程だった。

前年に県の指示で報国農場が設置されたが、この年は更に文部、農林両省から食糧増産に学徒を動員する



最後の関西旅行に使われた日枝丸

旨の通牒が発せられた。それを受けて県から「在校生一人宛七坪の農場を設定せよ」との指示があり、五月に、古谷村の荒川河畔及び入間川河畔の土地が開墾された。ここには里芋の植付け、蜀黍もろこし、陸稲の播種をした。これで三か所の報国農場総面積は七五〇〇坪になった。

前年からの近衛文麿による新体制運動に呼応するように、開校当初から使われていた甲、乙、丙という学級名称が、この年から一、二、三組にかわり、運動会も体育大会という名称になり、六月には、学友会が「報国団」に再編成された。

先に文部省は、学校を「皇国民タルノ基礎的修練ノ道場」として強化するため、その修練組織を確立することを求めていた。これを受けて、各学校では「興味本位娯楽第一」の校友会や学友会を解散させ、これ

報国団誌



「報国団誌」創刊号表紙。昭和17年11月に刊行されたが、創刊号のみで終わった

- 4・4(金)始業式 入学式
- 11(金)メートル法実施記念日で実測
- 24(木)四年生、関西修学旅行に出発
- 5・2(金)報国農場について学校長訓示
- 3(土)全校競歩大会
- 5(月)映画「燃ユル大空」見学
- 10(土)商大生受験勧誘指導のため来校
- 15(木)映画「美の祭典」見学
- 19(月)一〜三年、報国農場、居残生茶摘
- 27(火)海軍記念日 全校対級マラソン
- 28(水)開校記念日 奉安殿竣工式
- 6・9(月)農業報国団に申し学校長訓話
- 16(月)報国団結成式 始業七時三十分
- 21(土)全校勤労奉仕に出動
- 25(水)映画「父なきあと」見学
- 7・4(金)報国農場に粟を播種
- 26(土)宮城外苑整備寄付金の校長訓話
- 31(木)一学期終業式 木原校長退職
- 9・21(日)相撲部、埼玉県大会で優勝

日本▶ゾルゲ事件。1家庭子供5人の人口政策（産めよ殖やせよ国のため）。新聞、ラジオの天気予報中止。
 世界▶アウシュビッツでユダヤ人の処刑が始まる。独ソ戦開始。ルーズベルト・チャーチル会談。

を学校の教員組織も含めて「学徳身体技術共に逞しき青少年学徒たる練成を行う」ことを目的とする報国団に改組したのである。川中ではその運営のために総務、学芸、鍛練、国防、生活の五部制を設け、総務以外にはその管轄下に班をおいた。組織内容は次の通りである。

総務部 報国団に関する企画統制

学芸部 学芸班（旧弁論部中心、講演や映画会主催）、科学班（模型飛行機、模型

機械製作）、図書班、興亜班（旧郷土部）、

気象班（天体観測中心）、芸能班（旧書道

絵画部）

鍛練部 従来の学友会での運動部。他に新

しい組織として作業班（全校生徒が取り

組む勤労作業や報国農場作業を統轄）

国防部 教練班（教練の専門集団）、滑空

班（グライダー操縦訓練）、機甲班（自動

車操縦）、防空防諜班（空襲にそなえた

行動と訓練担当。全職員生徒で構成する

特設防護団、学生防空補助隊、予備隊を

統轄

生活部 養護班、配給班（旧購買部）、職

業指導班、進学班よりなり、生徒の生活

指導、進路指導にあたる。

他にも軍事教練的な班がいくつか特設されたが、これらの組織は、卒業生の記憶にはあまりない。従来の学友会組織以外のものは付け焼き刃的なものだった。

奉安殿が設置された

天皇后の御真影は従来校長室の奉安所に安置されていたが、この年五月、杉皮葺総檜、神明造りの奉安殿が正門を入って右手に建設された。室岡惣七（中4）の設計施工によるもので、建坪一坪、工費は七七五円であった。建設から一年半も経って御真影奉遷の許可があり、一九四二年十一月に校長室の奉安所から移された。



奉安殿（「皇紀2600年」記念写真より）

- 10・11（土）五年、体力章検定会
- 14（火）今朝より報国隊組織で朝礼実施
- 20（月）団栗蒐集
- 23（木）映画「勝利の記録」見学
- 27（月）二〇四年、体力章検定会
- 28（火）「教育者二賜ハリタル勅語」を職員室に奉掲
- 11・1（土）廃品回収
- 31（金）映画「潜水艦一号」見学
- 3（月）明治節拝賀式 体育大会
- 14（金）大正天皇御駐蹕記念週間
- 18（火）多摩御陵代表参拝（生徒一名）
- 20（木）大正天皇御駐蹕当時の謹話
- 12・5（金）科学班展覧会
- 8（月）米英に宣戦布告
- 27（土）二期学終業式
- 29（月）職員生徒で砂取り、校庭に撒く
- 1・8（木）始業式 小松國三郎教諭退職式
- 10（土）廃品回収
- 12（月）寒稽古（17日）
- 18（日）校内武道大会
- 2・3（火）四年、金属回収勤労奉仕
- 9（月）正常形質二関スル遺伝学的調査
- 14（土）予餞会
- 3・16（月）第四〇回卒業式
- 19（木）新入生実力考查
- 24（火）一〇三年、砂利運搬
- 25（水）作業（砂利運搬）
- 26（木）三学期終業式

太平洋戦争勃発と川中の戦争体制

日米交渉が行き詰まる中、戦争と中学校との距離はますます縮まった。

軍事映画「燃ユル大空」「潜水艦一号」や「勝利の記録」を見学し、たびたび軍人が来校して戦争の講話をする。川中の卒業生が海軍兵学校を優秀な成績で卒業したという話を校長がする。一方卒業生の戦死が伝えられると、「海行かば」を斉唱し、忠霊祠に祀った。グライダーでの滑空訓練が行われる一方で、一般の軍事教練は日常化し、一九四一年一月に示達された「戦陣訓」を五月には購入した。そして軍国主義による学校のファシズム体制の組織として、「学校報国隊」が編成された。文部省の「指揮系統ノ確立セル全校編隊ノ組織」を「適時出勤要務二服」するために樹立せよとの訓令を受けたもので、この隊組織を学校報国隊と称し、隊長は学校長が務めると定められていた。修練組織としての報国隊とは別で、

大隊(全校)―中隊(学年)―小隊(クラス)というピラミッド型の階層構造と、

隊長(学校長)―中隊長(学年主任)―小隊長

(組担任)―隊員(生徒)

という指揮系統をもつ、単純明快な軍隊的組織である。軍事教練はもちろん、勤労作業や毎朝の朝礼もこの組織で行われた。

十月十四日に報国隊組織での最初の朝礼が行われた。「荒鷲の歌」のリズムが校舎内外に溢れる中、八五〇人の生徒が「カシラ、ナカ」とか「中隊長殿に敬礼」といった軍隊式号令をかけて整列する。続いて宮城遙拝、黙禱、そして「海行かば」を斉唱して朝礼を終るのである。

そして運命の十二月八日。その日学校では朝礼で校長が訓示し、氷川神社に戦勝祈願した。翌日は宣戦の大詔を奉読し、防空補助隊に学校長が訓示し、忠霊祠に特別参拝した。十一日には二年生以上にも名前を書いた白布を上着に縫い付けさせた。二十五日には大本営発表のラジオ放送を生徒が直ちに聞けるように、スピーカーを各教室に取り付けた。

年が明けて一月四日、電報、電話を使って職員生徒の非常呼集訓練。七六割の生徒が集まった。また、この月から毎月八日が大詔奉

〈一九四一年の戦争関連年表〉

- 4・28(月)卒業生五柱を忠霊祠に合祀
- 5・12(月)防諜週間につき学校長訓示
- 23(金)「礼法要項」「戦陣訓」を購入
- 27(火)海軍記念日 国旗及び乙旗掲揚
- 6・20(金)貯蓄強制週間
- 7・3(木)滑空場寄付金に関し学校長説明
- 7(月)各学年銃剣道実施
- 12(土)五年、市葬参列
- 15(火)軍学校志願者 模擬試験
- 26(土)金沢、関根先生応召
- 9・13(土)航空日章配布
- 20(土)航空日に関する校長訓話
- 滑空班、秋ヶ瀬大会に参加
- 10・3(金)銃後奉公強化週間、正午黙禱
- 4(土)戦没将兵遺族応召家族生徒への慰問激励及び校長訓話
- 6(月)軍人援護の作品受賞者を表彰、慰問袋提出
- 14(火)報国隊組織にて朝礼
- 25(土)五年、軽井沢廠舎訓練(28日)
- 28(火)二年、軍役奉仕
- 11・16(日)五年、県下連合演習(17日)
- 30(日)機械化義勇団指導者講習会
- 12・8(月)米英に宣戦布告、生徒を中庭に呼集、氷川神社に戦勝祈願
- 9(火)宣戦の大詔奉読式
- 防空補助隊に学校長より訓示
- 忠霊祠に特別参拝 廃品回収

戴日とされ、三学期始業式の一月八日、宣戦詔書の奉読、校長訓話が行われた。

二月十五日にシンガポール陥落のニュースが伝わり、十八日には戦勝祝賀会が行われた。この日、初雁グラウンドに川越市内の警防団、在郷軍人会、勤労者、青年学校生徒、各種中等学校生徒、国民学校児童等、あわせて



一九四二年二月十八日、シンガポール陥落を祝した東条首相のラジオ放送を各教室で聞く

約一万人が参集。国民儀礼（国旗掲揚、宮城遙拜、出征兵士の武運長久を祈念する黙禱）を実施、続いて市長式辞、市長の発声で万歳三唱。式後、川商軍楽隊を先頭に、「国民進軍歌」「大東亜決戦の歌」を歌いつつ、各戸毎に掲げた日の丸のアーチの中を行進。蓮馨寺前の十字路で校長の発声で万歳。その後学校に戻り、正午にラジオで放送される東条首相の発声で、全国一斉に万歳を叫んだ。更に三月十二日には、ラングーン陥落とジャワ島攻略を期して第二次戦勝祝賀会が実施された。

川中では英語を重要視

一月三十一日、英語科研究会が開催された。授業参観に続いて、東京高等師範の教授が、「大東亜戦争と英語問題」と題して講演。従来からの英語に関する誹謗は井の中の蛙で、戦争地域が、すべて英語ならば通用するという事を考えると、英語を武器として宣撫工作に挺身しなければならない、そのためには今後英語がますます必要となる、と説いた。後年、次第に英語が日常生活から消されてゆくが、川中の英語の教員は「アメリカを占領する日のために英語を身につけておけ」と言って授業を行ったという。

- 14 (日) 機械化義勇団指導者講習会
- 22 (月) 実包射撃査閲(西久保射場)
- 25 (木) 校内ラジオ放送施設取り付け
- 1・4 (日) 突然の職員生徒非常呼集訓練
- 5 (月) 戦勝祈願競歩大会(大宮まで)
- 8 (木) 大詔奉戴記念日 始業式
- 10 (土) 大東亜戦争に関する論文提出
- 15 (木) 陸海軍機納資金として一人五〇銭拠出

- 24 (土) 耐寒全校鍛練行事(平方方面)
- 28 (水) 滑空訓練指導者講習会(二週間)
- 2・2 (月) 雪中行軍遭遇戦並びに攻防戦
- 12 (木) 香港爆撃体験談の講演
- 18 (水) シンガポール陥落大東亜戦争第一次戦勝祝賀会
- 3・12 (木) 大東亜戦争第二次戦勝祝賀会

十二月八日 七時に臨時ニュースが入って日本の陸海軍が西太平洋にあって交戦状態に入った由の報道があった。

英米と戦争状態に入りしとふ

ニュウスキきつつ拳にぎりつ

こんな歌ができた。いよ／＼行く所まで行ったのである。出勤の途上大分早く人も少なかったが、その人達の二人三人かたまってゐる話はずべて之に集注されてゐるやうであった。(吉川静雄教頭の日記より)

父兄会が発足した。 滑空訓練が頻繁に行われた。

一学年の定員が二〇〇名になって三年目を迎え、生徒数の増加に伴う施設設備の整備は、各中学校の課題であった。そこで校長が保護者に働きかけ、一九四二年七月、「川越中学校生徒ノ教育ニ協力スル」ことを目的として「父兄会」が発足した。父兄会は在学生徒の保護者で構成され、教練や理科の施設充実、図書購入、および進学希望者向け補助授業実施のために、それぞれ物的経済的援助を行ったのである。初代会長には岩沢新平(中1)が就任した。

滑空訓練が本格化した。一九四〇年から県下の中学校で取り組まれ、川中でもグライダ―部(滑空班)員が参加していた。この年は三年生全員の参加で、五月に坂戸国民学校を宿营地として四泊五日で行われた。訓練は地上での操作訓練から始まり、次に人間が綱をひいて、地上滑走、跳躍、高度

一対直線滑空、と進むのである。

また、子科練への勧誘が頻繁になり、八月には甲種飛行子科勸奨映画会が開かれた。翌年一月には、朝日新聞社から滑空機一機を寄贈された。当時朝日新聞社は全国の中学校への滑空機寄贈事業を行っており、この時県内では、川中のほかに浦中、浦商、熊中が寄贈された。贈呈式が一月十日に羽田で行われ、校長と滑空班員がこれに参加。滑空機は二十九日に川中に到着後、校庭で組み立てられたが、訓練は坂戸の飛行場で行った。こうして、「武勲の若鷲」を夢見て子科練を志す中学生が増えていった。

一方、陸軍関係の教練行事も強化され、五年生の軽井沢廠営訓練が六日間にのび、四年生も九月に三泊で行うようになった。学校での勤労奉仕も強化された。一九四一年に年間三十日以内は授業を勤労作業に



朝日新聞社から送られた滑空機を背にする滑空班員

- 4・6(月)入学式
- 18(土)蓮見幸雄(中23)講演
「南方事情及び連邦国」
- 5・8(金)三年、滑空訓練出発
- 27(水)海軍記念日 一万リマラソン
- 6・9(火)映画「將軍と参謀と兵」見学
- 15(月)五年、軽井沢廠営訓練(21日)
- 19(金)各学年、農場や近在の村の麦刈りに勤労奉仕
- 7・3(金)陸軍幼年学校平井少佐講演
- 18(土)父兄会創立総会
- 23(木)県下野球大会開始
- 26(日)職員、宮城外苑整備作業に動員
- 27(月)道路奉仕作業(8/12)
- 8・6(木)甲種飛行子科勸奨映画会
- 20(木)相撲班、榎原神宮大会に出発
- 26(水)配属将校海北中尉着任

日本▶関門トンネル下り線開通。「海ゆかば」国民の歌に指定。標語「欲しがりません勝つまでは」。
 世界▶連合軍26か国共同宣言、対日単独不講和を確認。連合軍、対ドイツ大反攻開始。

振り替えてよい旨の通知が文部省からなされ、一九四二年の川中では、一学期は農家への奉仕作業や報国農場の作業に、全学年が交互に出て、麦刈りや脱穀、草取りに従事した。また夏休み中は七月二十七日から各学年二日ずつ、鶴頭坂付近の道路新設のために、主に土運びを行った。

皇国民としてのイデオロギー錬成の中心行事は、十一月に一週間かけて行われた大正天皇御駐蹕三十周年記念行事である。

御駐蹕記念日の十一月十四日、御真影が奉安殿に移された。十七日には全校八〇〇余名の生徒職員が、冷雨降る中を八王子から歩いて、大正天皇の陵墓である多摩御陵に参拝。二十一日には御座所が公開され、奉安殿と併せて一般市民が拝観した。そして御駐蹕記念絵葉書七枚が発行された。

ついで十二月八日には大東亜戦争一周年記念行事が行われた。学芸部が中心となり、四、五年は「大東亜戦争一周年と生徒の覚悟」、一～三年は「開戦当時の回顧」というテーマで、全校生徒に懸賞作文を書かせた。同時に興亜班主催で、戦争の勝利の記録、南方事情を生徒に知らしめる標本、地図、写真などの展覧会が開かれた。

戦局が悪化する中、学校と父兄を結ぶ連絡紙「初雁」が翌年三月に創刊された。タブロイド半折判の四面構成で、川中の一年間の記録が記されている。しかし一九四四年三月、川越警察署特高係から、「時節柄『報国団誌』と『初雁』の発行を停止するように」という連絡が入り、ともに創刊号だけで終わってしまった。

初雁
第一號
立派な紙
校章中絶川

軍人勅諭誤読騒動

七月四日の軍人勅諭奉読にあたって、これを読み慣れない栗岡校長が読み誤り、笑い声此起彼伏という事件が起きた。配属将校のみならず、教練教師や生徒の中にも校長の責任を追及しようとする動きがあったが、文部省の支援を得た校長はこれを押し切り、配属将校伊ヶ崎中尉が転任となった。

- 9・10(木) 関口教諭航空美術展入選
- 12(土) 四年、軽井沢廠舎訓練(15日)
- 22(火) 埼玉県国民体育大会相撲班優勝
- 30(水) 陸軍予科士官学校生徒隊長講演
- 10・6(火) 体力章検定会
- 8(木) 第三回模擬試験
- 26(月) 五年、実弾射撃(松山)
- 11・3(火) 明治節 体育大会
- 9(月) 古雑誌回収
- 10(火) 『報国団誌』 刊行
- 14(土) 御駐蹕三十周年記念行事
- 27(金) 教練査閲
- 29(日) 大政翼賛会主催の行事に参加
- 12・4(金) 五年、県下連合演習参加
- 8(火) 大東亜戦争一周年記念日
- 11(金) 英米撃滅戦場精神昂揚川越地区
県民大会を川中講堂にて開催
- 14(月) 銅貨、白銅貨回収
- 26(土) 一～四年、砂取り作業
- 1・10(日) 朝日新聞社より駒鳥型滑空機を
一機寄贈される
- 12(火) 滑空査閲(於熊谷)
- 21(木) 健民耐寒心身鍛練(2/4)
- 2・6(土) 読売新聞記者高岡幸雄氏講演
「決戦の秋、昭和十八年」
- 15(月) 予餞会
- 3・3(水) 学校父兄連絡紙「初雁」創刊
第四一回卒業式
- 23(火) 本館屋上の裝飾柵を撤去供出

「修練」の授業が始まり、 一年生、戸田で海洋訓練。

「決戦の秋、昭和十八年」を迎えて中学校は大きく変わった。一月に、それまでの中学校令にかわって中等学校令が公布された（42頁参照）。これによってこの年から始まったものの一つが「修練」の授業である。

これは従来の「作業」の授業を発展させて、鍛練などの精神修養の意味合いも込めようとしたものである。川中では教練関係の授業も組み込み、六月十日から始まった。主な内容は、駆足、体操、閱兵分列、勤勞奉仕、射撃、行軍等である。その実施にあたって、生徒と教員との一体感も強調され、生徒と一緒に駆足したり、昼食を食べるといったことも行われた。

また十月三日に始まる「健民修練」は、肉体的にひ弱と見なされた生徒を柔道場に宿泊させて特別に鍛練したもので、教員も交代で泊まった。これは翌年も夏から秋に

かけての二か月間行われた。

この年の新しい行事として、一年生を対象とした海洋訓練が実施された。

四クラスを二つに分け、第一次隊は七月三十日に川越を出発。小田急、箱根登山鉄道を乗り継いで小涌谷に向かい、そこから元箱根まで歩いて宿泊。翌日は山の中の東海道を三島まで歩く。これが長く、なかなかの難所だった。そこから沼津へは電車ですべて沼津からは船で戸田に着いた。

三日目となる八月一日からいよいよ海での訓練が始まる。内容は水泳が中心であるが、古式泳法の修得を中心とした従来の水泳教授とは違って、純然たる軍事教練であった。平泳ぎが重視されたというが、いかに長時間にわたって海に浮いていられるかが第一の目的で、艦船が撃沈された時のための訓練だったのではないとも言われた。



海洋訓練は純然たる軍事教練だった

- 4・6(火)入学式
- 8(木)始業式
- 24(土)映画「マレー戦記」見学
- 5・12(水)五年、軽井沢廠舎訓練(18日)馬事訓練に二名参加
- 15(土)勤皇烈士先覚者顕彰祭に参列
- 27(木)海軍記念日 土浦航空隊員講話
- 28(金)開校記念日 一万以マラソン
- 6・5(土)山本五十六元帥国葬、校長講話 甲旗掲揚、全国一斉に拝礼
- 9(水)大政翼賛会総務葛生能生氏講話「大東亜戦争を勝ち抜く覚悟」農家へ勤勞奉仕(麦刈り)
- 17(木)課外修練実施
- 24(木)勤勞奉仕(芳野村)
- 27(日)三年、滑空訓練(坂戸)

日本▶谷崎潤一郎の『細雪』、軍部の圧力で連載中断。標語「撃ちてしまむ」。アッツ島日本軍2500名玉砕。
 世界▶コミンテルン解散。イタリア、ムッソリーニ失脚、降伏。米・英・中、カイロ会談。

最後は二*の遠泳である。波をかぶりながら、ふらふらになって目的地にたどりつく。ほかに手旗信号の訓練。まさしく海軍の訓練である。こうして戸田の海で一週間の訓練を受け、八月六日に川越に帰りついた。

勤労奉仕については、引き続きクラス毎に農繁期の農家の手伝い等が実施されてきたが、六月に「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定されたのを受けて、県は八月に県内の中学生を工場へ、あるいは食糧増産のための開墾作業へ動員した。

川中では八月一日から十日間、四年一一名が中外火工、荒井伸銅、朝霞伸管、三年一六〇名が陸軍航空整備校、東洋ゴム、帝国火工に、それぞれ動員された。伸管での作業は銅やその合金で、航空機に必要な材料を作るのである。

「一日戦死」と「日曜献納」

この頃の教師の日記には「一日戦死」という言葉がある。これは飛行機献納のために、教員は給料日に一日分の俸給を出したり、貯蓄するのである。

また日曜日は「献納」されることになり、二週に一回は登校、出勤することになった。

物資節約に関して、九月八日に県内政部長より通牒があった。女学生の下駄履き禁止、中学生の下駄は許可制、卒業アルバムは作らぬこと、風呂敷使用を奨励する、時計、外套は一切使用不可というものである。戦前の卒業アルバムは一九四三年三月のものが最後である。

野球班の最後の試合が十一月に行われ、その後バックネットが供出された。

軍学校への志願が急増

川中の軍関係学校への進学者は急増した。一九四四年三月現在で、陸軍予科士官一二名、陸軍幼年五名、陸軍経理一名、特幹候補四名、少年飛行兵五名、海兵一〇名、予科練三七名、乙種飛行兵一名であった。

しかしそれは生徒の自発的意志によるものとはかりはいえない。一九四三年には予科練への応募者数の割当てがあった。川中は二四名。しかし生徒の希望者数はわずか三。そこで学校は生徒を積極的に勧誘し、時には問題を起こした生徒に対して、予科練受験でつじつまを合わせた。その結果十一月の段階で予科練希望者は三年生を中心として四一名に達し、三十数名が合格した。

7. 5(月) 土浦海軍航空隊大尉講演、映画
 - 18(日) 海軍希望者模擬試験
 - 24(土) 終業式
 - 30(金) 一年、海洋訓練第一次隊出発
 8. 1(日) 三、四年、勤労動員(10日)
 - 5(木) 一年、海洋訓練第二次隊出発
 - 21(土) 二学期始業式
 - 23(月) 五年、海洋訓練出発(31日)
 9. 4(土) 陸士関係模擬試験(5日)
 - 9(木) 四年、軽井沢廠舎訓練(15日)
 - 18(土) 陸軍予科士官学校教授講話
 - 21(火) 坂田今朝三教諭出征壮行式
 - 24(金) 県下体育大会参加(大宮公園)
 10. 3(日) 健民修練開始
 - 27(水) 映画「シンガポール総攻撃」見学
 11. 3(水) 明治節 体育大会開催
 - 14(日) 野球班最後の試合(対川商戦)
 - 19(金) 五年、連合演習出発(21日)
 - 20(土) 乙種予科練三名壮行会
 12. 13(月) 報国隊旗できる
 - 14(火) 滑空査閲(秋ヶ瀬飛行場)
 - 24(金) 教練査閲
 - 28(火) 終業式
 1. 4(火) 生徒非常呼集
 - 軍人勅諭奉読式、閲兵分列
 2. 3(木) 映画「海軍」見学
 3. 4(土) 第四二回卒業式
 - 29(水) 川越警察特高来校、「報国団誌」
- 「初雁」の発行停止を命ずる

皇国民の錬成から工場への動員へ — 決戦体制下の学校教育 —

一九四一年に、『皇国の道』にのっとった初等教育を施し、皇国民の基礎的錬成をなすことを目的として国民学校が発足した。そしてそれを中等教育にも押し広げるべく、一九四三年一月に新たに中等学校令が公布された。ここでの変革の大柱は、修業年限を五年から四年に短縮したこと、四、五年にあつた実業科、普通科の別をなくしたことである。

ほかに改訂された点は、
 一、「学科」を統合して「教科」に編成した
 二、「教練・体操」から「教練」を独立させ、授業時数を増やした
 三、「修練」という授業を新設した等である。

新しく設置された「修練」は、一九三二年から始まった「作業」を起源とする。これは中学校での実業教育が必要視されて始まったものだが、やがて日中戦争の勃発による労働力不足を補充するために、軍の要請で勤労作業や勤労奉仕という名称で増やされた。一方で文部省は、学校を様々な行を通じても皇国民錬成を行う道場にしようと考え、作業

に精神教育の意味を込めたものとして「修練」を設置したのである。

表3に見られるように、すでに川中でも皇国民錬成の儀式が日常的に行われていた。しかし、「修練」の授業展開となると戸惑いが見られ、結局作業や教練、行軍で終わつた。また労働力の確保をめざす軍としては、これではまだるこかつた。一九四三年六月に、「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定されると、学徒の生産勤労への動員が、夏休みだけでなく授業中にも、そして農業だけでなく工業にも拡大された。

十月にはいとと政府は、「教育ニ関スル戦時非常措置方策」で、中学四年制の繰上げ実施（一九四四年度から）、文科系高等教育機関の理科系への転換、学徒動員期間を四か月とする等を決定した。

県ではこれを受けて翌年一月十五日、中学校に具体的に指示を出した。それによると、

- 一年（授業日数は二五〇日）の三分の一を修練として勤労動員にあててよい。

●授業日数は、一、二年が二〇四日三四週、

		1年	2年	3年	4年
国民科	修身	1	1	2	2
	語史地理	5	5	5	5
理科	数学	2	2	2	2
	生物	1	1	1	1
体操科	数	4	4	4	5
	生物	4	4	6	5
芸能科	教練	3	3	3	3
	体道	2	2	3	3
実業科	武	2	2	3	3
	音書	1	1	3	3
実業科(農工商)	道画	1	1	3	3
	工	1	1	3	3
外国語科		4	4	(4)	(4)
修練		3	3	3	3
計		35	35	36	36

表2 1943年教育課程

		1年	2年	3年	4年	5年
					1種 2種	1種 2種
国民科	修身	1	1	1	1	1
	語史地理	7	7	7	6	6
理科	数学	3	3	3	3	3
	生物	5	5	6	3	3
体操科	数	5	5	6	4	4
	生物	2	3	1	1	1
芸能科	武	1	1	3	4	3
	音書	2	1	1	4	1
実業科	道画	1	1	1	1	1
	工	2	1	1	1	1
外国語科		1	2	1	1	1
修練		4	4	4	4	4
計		4	4	2	4	4
計		33	34	35	35	35

表1 1942年教育課程

三、四年が一八〇日三〇週、五年が一四〇日三週を下るな。

●日曜に「修練」や授業をやってもよい。だが三月には「決戦非常措置要綱」に基づく学徒勤労動員実施要綱」によって、動員は通年とされ、しかも対象が一、二年生にまで拡大されることになった。

これを受けて川中では、やがて始まる通年動員の前に、一九四四年四月から七時間授業隔週日曜に授業、祝祭日は廃止とした。

こうして文部省の「修練」の構想は、軍部による生産第一主義に蹴散らされるのである。

朝 礼	授業時・放課後
校庭集合(報国隊編成)	授業始め：黙想
学校長受礼	第1時：「青少年学徒ニ
宮城遙拝	賜ハリタル勅
武運長久祈願	語」奉読
忠霊祠拝礼	昼食時：師弟会食
学校長訓話	全校体操
「海行かば」斉唱	放課後：清掃作業
週番達示	報国団各班錬成

表3 1942年の錬成日課表

戦争映画鑑賞への動員

一九三八(昭和一三)年ころから川中では度々映画を観るようになる。それは映画の社会的影響力が注目され、映画への指導統制を確立すべく、一九三九年に映画法が制定されこれによって政府は、国民教育上有益と判断した映画を強制上映させることが出来るようになったからである。この時期に川中生が見学した代表的な映画には、「土と兵隊」や「西住戦車長伝」がある。ともに小説の映画化である。

一九四〇年十二月に、映画の担当は文部大臣から内閣情報局に移った。そして情報局は国民的理想を顕現した「国民映画」を各映画会社に作らせたのである。

「燃ユル大空」は日中戦争での陸軍九七式戦闘機部隊の活動を描き、「マレー戦記」はマレー上陸からシンガポール突入までを撮った。「ハワイ・マレー沖海戦」は対米英開戦一周を記念して公開されたもので、太平洋戦争初期の海軍士官の成長を軸に「山谷英二」の特撮によって両海戦が再現された。「海軍」はハワイ奇襲攻撃に参加した青年将校の生い立ち、「決戦の大空へ」は子科練の少年たちの日常生活を描き、共に軍部が製作に関与した。

「轟沈」にいたっては、インド洋の潜水艦に乗り組んで実戦を撮影した映画である。

特に「ハワイ・マレー沖海戦」は「キネマ旬報」一位となり、映画館が営業しない午前中の時間に、学校単位で非常営利に団体鑑賞させることが目指された。これ以後、国民学校や中学校の生徒が集団で国策映画を鑑賞させられるようになった。こうして映画が国民の戦意高揚に果たした役割は大きい。

川中生が見た戦時映画一覧

- 一九三八年「スパイ戦線を衝く」(ドイツ)
- 一九三九年「空襲」
- 「土と兵隊」(日活)
- 一九四〇年「暁に祈る」(松竹)
- 「われらの教官」
- 一九四一年「民族の祭典」(ドイツ)
- 「西住戦車長伝」(松竹)
- 「燃ユル大空」(東宝)
- 「美の祭典」(ドイツ)
- 「勝利の記録」(ドイツ)
- 「潜水艦一号」(日活)
- 一九四二年「将軍と参謀と兵」(日活)
- 一九四三年「ハワイ・マレー沖海戦」(東宝)
- 「マレー戦記」(日本映画社)
- 「シンガポール総攻撃」(大映)
- 一九四四年「海軍」(松竹)
- 「加藤隼戦闘隊」(東宝)
- 「轟沈」(日本映画社)
- 「決戦の大空へ」(東宝)

一年生、入学直後に宿泊訓練。 学校から生徒の姿が消えた。

これまで廠営訓練は四、五年生で行われてきたが、この年の川中では新しい試みとして、入学早々の一年生を、五泊六日の日程で富士の裾野で訓練することになった。

しかし内容は四、五年生対象のものとは違ふ。前年に軍から、生徒の意気盛んな入学当初に軍隊礼式を身に付けさせ、服従心養成の訓練を実施するよう要請があり、学校でもこの行事の目的を「厳正ナル姿勢態度、端正ナル服装、明快ナル言語応答、敬虔ナル敬礼」を身に付けさせ、「教練日常生活ノ基礎」を確立するためとした。

入学して三日後の四月十日、戦闘帽をかぶり、左肩から水筒、右肩から雑嚢を胸で交差させ、足にはゲートルという服装で川越駅を出発。御殿場駅まで行き、そこから板妻(現自衛隊の駐屯地)の宿舎「楽山荘」まで長い行軍。一クラスを四班にして、四

年生がそれぞれの班長になった。

現地での訓練は上級生の吹くラッパの合図で行動した。集合、整列、点呼、移動。そして「不動の姿勢」や様々の礼、歩き方の振り方、歩調の取り方等の訓練。軍事演習的なものはない。まさに生活全般にわたっての基礎訓練だった。

五月十三日、栗岡校長が転勤するというので、急遽予科練入隊者二一名と特別幹部候補生一名の壮行式が校庭で行われた。彼等以外の軍学校進学予定者と共に、四十数名で一クラスに編成されていた。入隊者は教員や仲間へ寄せ書きを書いてもらった日の丸を袈裟がけにしてグラウンドに整列。校長から訓示を受けた。

入隊者は五月三十一日に氷川神社に参拝。その足で川越の中央通りを行進。川越駅で級友の激励を受けて列車に乗り込み、その



1944年5月13日、予科練入隊者の記念撮影。
前列左から教頭、校長、学年主任

4・7(金)入学式

10(月)一年、富士裾野廠営訓練に出発

17(月)七時間授業始まる

23(日)第一回日曜献納日 四時間授業

29(土)栗岡校長、陸軍諸学校への進学
顕著につき表彰される

4月 映画「加藤隼戦闘隊」見学

5・13(土)予科練入隊者壮行式

15(月)栗岡校長、福井県小浜中へ転任

第一三代校長に小島承一氏就任

6・1(木)五年、通年動員始まる

14(水)四年二〇名、予科練見学

映画「轟沈」見学

15(木)一年農耕作業(29日)

23(金)海北中尉本庄中学へ転出

日本▶沖縄からの学童疎開船「対馬丸」、アメリカの魚雷で沈没、1500人死亡。標語「進め一億火の玉だ」。
 世界▶連合軍、ノルマンディー上陸作戦。パリ解放。ドイツ、V2ロケット開発。



雄大な富士山裾野での一年生の宿泊訓練。どの顔にもまだあどけなさが残る

日のうちに土浦の航空隊に入隊した。
 その後も軍関係学校への進学を希望する者は増え続け、九月に明らかになった合格者数は、陸士七名、海兵一三名、海機五名、海経一名だった。十一月段階での予科練希望者は三九名だった。中学一、二年で受験できる陸軍幼年学校にいたっては八三名が

志願した。結局翌年二月の段階での陸海軍諸学校への進学者数は六五名にもなった。川中は全国的に見ても陸軍関係の学校への進学が多かったという。その「功績」で四月には栗岡校長が表彰されているし、十月に行われた元駐伊大使白鳥敏夫氏の講演も、川中が「軍からの覚えがよかった」から実現したものであろう。
 こうした中で、ワシントン軍縮条約によって退役となり、川中に数学教師として赴任していた元海軍軍人の長谷川貞平先生は、日本とアメリカの軍事力の差を冷静に認識し、この戦争の不可なるを生徒に説き、軍学校への進学にはやる生徒を「今から出ていっても仕方がない」と諭したという。
 この年の夏からいよいよ本格的な勤労働員が始まった(46頁参照)。六月から五年生、七月から四年生、八月から三年生、そして年が改まって二月に一、二年生がそれぞれ軍需工場に動員され、学校から生徒の姿が消えた。
 そして三月二十八日は二つの学年の卒業式。五年生だけでなく、四年制の繰上げ実施で、四年生も一緒に卒業させられたが、両学年とも勤労働員は六月まで続いた。

- 金久保金次中尉着任
- 27 (火) 映画「決戦の大空へ」見学
 - 6月末 通知「近況おしらせ」を配布
 - 7・10 (月) 四年、朝霞被服廠に通年動員
 - 30 (日) 一年、水泳訓練(8/4)
 - 8・16 (水) 三年、上福岡火工廠に通年動員
 - 21 (月) 二学期始まる
 - 23 (水) 一、二年、荒川農場で草刈り
 - 26 (土) 健民修練始まる(10/24)
 - 特幹の割当て三〇名
 - 9・9 (土) 予科練入隊者壮行式
 - 18 (月) 海軍予科の推薦順位決定
 - 27 (水) 陸幼推薦順位決定八三名
 - 10・19 (木) 高等商船の内申書完成四〇名
 - 21 (土) 白鳥敏夫氏、刈谷守宏氏講演
 - 26 (木) 乾麵第二回配給
 - 11・3 (金) 明治節、四、五年登校、三年は動員先にて作業
 - 14 (火) 三五キを行軍
 - 21 (火) 上福岡火工廠にて生徒事故(死亡)
 - 12・7 (水) 空襲あり
 - 18 (月) 教練査閲
 - 27 (水) 三、五年の乾麵配給
 - 1・1 (月) 四方拝、三年は動員先に出勤
 - 17 (水) 予科練身体検査、五四名受験
 - 2・14 (水) 一、二年、通年動員開始
 - 3・20 (火) 入学考査
 - 28 (水) 昭和十九年度卒業式(43・44回)

全学年にわたった勤労働員 — 死者二名、重傷者二名 —

一九四四年三月の「決戦非常措置要綱」によって、全学年ク学徒勤労働員実施要綱」によって、全学年にわたる通年の勤労働員が夏から始まった。

まず一九四四年六月一日より五年生(中43)、続いて四年生(中44)も七月十日から、共に陸軍被服廠に動員された。遅れて八月十六日から三年生(中45・46)が上福岡の陸軍造兵廠(通称火工廠)に勤労働員となった。

年が明けて一九四五年二月十四日には、二年生(中47・高1)と二年生(中48・高2)も動員が決まった。二年生は下の表のように、動員先がクラスによって分かれた。一年生は三年生と同じ火工廠である。

動員先での作業内容をまとめると次の通りである。

まず、四、五年生と二年四組の三五〇名の川中生が動員された朝霞の陸軍被服廠。ここでの作業は軍被服やレンガ、木炭、角材、その他の製品の運搬作業が中心で、編上靴の木箱を作るといふ作業もあった。国民は少ない配給でなんとかやりくりしていたが、倉庫の中には軍需物資が山のように積まれ、生徒は

ため息をついた。

更に空襲に備えての備品のための防空壕掘り、末期には物品の疎開のための突貫的な運搬作業や、倉庫の取り壊しといった、中学生には肉体的にかなりきつい作業もあった。

ここでは十二月二十八日の夕方、五年生の栗原三省(中43)が混雑する朝霞駅で電車から転落、死亡するといういたましい事故があった。また翌年七月二十六日に、当時三年生だった橋本日出松(高2)がトロッコを使って疎開物資の機械を運搬中、トロッコが脱線して落ちてきた機械に上半身を挟まれ、足腰を骨折するという重傷を負った。

次に三年生と一年生の四〇〇人が動員された上福岡の火工廠である。ここは武器製造が中心で、二〇ミリ対空機関砲の信管、航空機用爆薬、対戦車地雷(金属がなくなつて陶製のものだった)の他、一部では風船爆弾の部品も製造していた。

このように危険な火薬の中にいたので、何か爆発事故が起きた。そして一九四四年十一月二十一日、当時三年生の生田巖が爆発に

学年組	人数	動 員 先	期 間
5 年全組	150名	陸軍被服廠朝霞支廠(朝霞市)	44.6~45.6
4 年全組	150名	陸軍被服廠朝霞支廠(朝霞市)	44.7~45.6
3 年全組	200名	第一陸軍造兵廠東京製作所(上福岡市)	44.8~終戦
2 年 1 組	50名	浅野カーリット(川越市古谷)	45.2~終戦
2 年 2,3 組	100名	陸軍高萩飛行場(日高市)	45.2~終戦
2 年 4 組	50名	陸軍被服廠朝霞支廠(朝霞市)	45.2~終戦
1 年全組	200名	第一陸軍造兵廠東京製作所(上福岡市)	45.2~終戦
1945年度 1 年全組	200名	石川製糸(現川越市立図書館付近) 日清製粉(本川越駅付近)	45年 1 学期

川越中学勤労働員一覧表 (1944~45年)

巻き込まれて死亡。また、時期不明だが同年の高篠晴夫(中46)が、爆発で指を吹き飛ばされるという怪我を負った。

二年二、三組一〇〇人は陸軍高秋飛行場である。高秋飛行場では変圧器の爆風避けや飛行機を隠す掩体壕を作ったり、飛行機の整備道具を磨いたりといった作業を行っていた。そして二年一組五〇人の浅野カーリットである。カーリットとは火薬のことでここでも地雷や手榴弾の信管作業、運搬、摺り込み、発煙筒の製造が行われた。生徒は直接危険な作業にはあたらなかったが、いつ爆発事故が起きてもおかしくない所だった。

動員が始まって間もない一九四四年十一月

昭和十九年八月から「勤労働員」という国家命令で、朝霞の陸軍被服廠へ通い始めた。一年間毎日、綿布だの、軍靴だの、五〇践、六〇践の荷物を担いで、トロッコに積み、押し運び、貨車に下ろし載せたり、つまり荷担ぎ人夫をやった。三か月過ぎる頃、全死ぬほどの疲労感が拭い去られ、全身に山を抜く氣力が漲ってきた。将来のことなど何も考えず、日々楽しかった。被服廠の中からもいつも秩父連峯及び比企丘陵が見えていて、こいつが私の骨に摺り込まれた。

荷担ぎ人夫の勤労働員

年が明けると進学受験ということになった。文部省の言いつけで、先ず、体力検査があった。いろいろやらされたが、六〇践の俵を下から担ぎ上げ、五〇践走れというのがあった。これなら毎日やっていた。六千人中一番だったのではないか。三〇践の俵を頭上に差す種目も百回を越えた時、試験官が「もういい！」と言った。二次試験は、千人ぐらいで受けた。学問だった。受けた奴は頭脳明晰とは言いがたい連中はかりだった。おかげで今の私がある。(打木城太郎・中43)

教員が何回かに分けて各動員先を視察、それを簡単な報告書にまとめている。その報告書の綴りが、図書館のロッカーの中に保管されていた。いずれも生徒の真剣な作業ぶりを伝えていている。

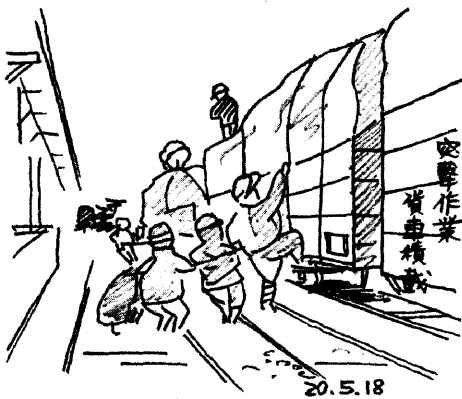
その中で注目すべきものは、爆発事故で生田巖が死亡した火工廠の視察報告書である。事故当日の十一月二十一日と、二十三日、二十五日に視察している。二十一日の報告書には「当日九時三十分頃事故の為見学中止なる故に後の作業状況判明せざる」と書いているだけであり、更に翌々日の報告書には事故のことは全く触れられていない。ようやく二十五日に視察した教諭の報告書に「三学年一、

二組全日作業、三、四組ハ生田巖葬送ノタメ作業午前中」とあるだけである。

学校へは二十一日に連絡があったが、事故の原因は本人の不注意とされた。その後も視察しているが、更に事故の原因を究明しようとする記述はない。ただ「作業ハ細心ノ注意ヲ必要トスルヲ以テ生徒ノ心勞監督教諭ノ任務大ナルモノト思考ス」と述べるだけである。

この様な動員が続く中、始めのうちは一週間に一日登校日があつて、授業が行われたり、あるいは動員先で休み時間等に引率の先生が即席の授業を行ったという。

そして学年が改まっても組替えはなく、そのまま動員が続いた。



カット・山根 豊(中44)

川越中学校の「八月十五日」。

一九四五年三月に閣議決定された「決戦教育措置要綱」で、国民学校初等科以外の

授業は四月一日から停止され、全生徒が食糧増産や軍需産業、防空防衛に動員されることになった。二月以来生徒の姿が消えた川中には、四月から関東第五軍が入った。

そういう状況下、四月に新一年生二〇三名が入学した。六月には疎開者を中心とした転入によって二七二名にふくれあがった。

上級生は勤労働員が続き、この学年もまもなく石川製糸と日清製粉に一、二か月ほど動員された。作業は繭の入った袋や小麦粉、大豆粉の入った袋の運搬である。

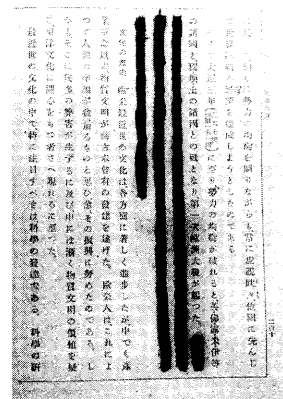
この工場動員のほか、農場開墾、農家の茶摘みの手伝いがあり、学校での活動は防空壕掘りや戦技訓練ばかりである。グラウンドは畑に変わり、くすの木の周辺は防空壕だらけとなった。通用門を入れて左手の土

俵の下に掘られた壕は地下三階までであり、第五軍の指令部だった。

しかし、それでも中間考査や期末考査が実施された。内容はともあれ、学校側は学校としての機能維持に苦心した。

そして八月十五日。二年生以上は動員先で、一年生は学校や勤労働先先の農家等、それぞれの場所で「玉音放送」を聞いた。戦後はどう動き始めたか。

GHQによる占領を前にした八月二十一日の校長常会で、国勢を判断される書類や動員に関する書類を隠蔽あるいは焼却すること、という指示が出された。川中では、書類ではないが、明治文庫に所蔵してあった軍関係の雑誌、書籍などを、教員に分け与えて処理した。また戦前の教務日誌も現存しない。しかし戦時中の県の指示がうかがえる校長常会関係の資料は残された。



部分的に墨で消された教科書

4・2(月)川越付近空襲を受ける

4(水)関東第五軍部隊、校舎に入る

9(月)入学式

11(水)新入生の躰訓練開始(14日)

12(木)階段教室と奉安殿前に着弾

24(火)新河岸にB29墜落、捕虜米兵三名川中の第五軍部隊へ連行される

6月上旬 一年、中間考査実施

6・26(火)中43・44回生、被服廠退廠式

7・12(木)戦技訓練幹部講習会実施

27(金)配属将校佐藤大尉着任

一年、期末考査(29日)

30(月)少年飛行兵、特幹候補生志願者の順位を連隊に連絡

8・12(日)一年、登校日、一学期成績発表

15(水)玉音放送を聞く

18(土)動員解除(朝霞被服廠、高萩飛行場)

31(金)転入学試験施行

9・1(土)始業式

10月 四年学級自治会に甘藷配給

日本▶広島、長崎に原爆投下。東久邇宮首相「一億総懺悔」。三木清、獄死。第1回宝くじ、1等10万円。
世界▶米・英・ソ首脳、ヤルタ会談。第2次世界大戦集結。国際連合創設。IMF、世界銀行の設置決定。

やがて占領政策が始まると、軍国主義教育払拭のため、教練や武道は中止になった。十二月には神道の象徴の除去をGHQから命じられ、御真影が返還された。更に小島校長は、GHQが天皇制に関わるものにも目を光らせていると判断。大正元年の特別演習記念碑を玄関前の地下に埋めさせた。

授業は九月一日から再開された。しかし勤労働員が終わって生徒が学校に戻り、また疎開学級を更に増設せねばならないのに応召から戻らない教員がいるという事情から、授業は一日四時間、四十分授業の二部制で暫定的に始まった。

生徒の動きとしては、十月には校友会が復活し、学校自治会が開催された。講堂での全校集会で、戦時中の軍国主義教育について生徒と教員がやりとりし、中には謝罪する教員もいたという。

軍学校からの復学者に 「補習科」

戦時中、川中を中退して予科練等の軍関係諸学校に進んだ者を対象に、「補習科」の設置を具に申請して、将来への道を開く方法がとられた。これには、すでに川中を

卒業して上級学校を目指す者や、川中以外の生徒で上級学校を目指す者も対象とされた。川中父兄会が開設者となり、川中の教室で、川中の教員が週二十時間授業にあたった。期間は一九四六年一月十五日から三月十五日まで。生徒数は川中卒業者三五名、未卒業者、復員者四〇名、埼玉の他校関係者九名の合計八四名に達した。

未卒、復員者はこの補習科によって川中卒業の資格を得た。受講者の中で、二一名が高等師範や高校、大学予科等に進学した。現役の四年生は四年で卒業か、五年で卒業かを選択。四年で卒業する一三六名が三月二十八日の第四五回卒業式を迎えた。

八月十五日

その日は夏休みにも拘らず、朝から学校に行き、防空壕掘りの作業をしていた。暑い日で汗を流していた。正午に重大な放送があるということ、学校の玄関前に集められて整列した。直立不動の姿勢で、ラジオの天皇陛下の玉音を聴いた。それはボツダム宣言を受諾する内容であるが、その意味はすぐにはわからない始末だった。放送聴取後、校長先生？の話があつて、わが国が戦争に敗れた

31(水)校友会生徒役員選出締め切り

11・24(土)学校自治会開催

29(木)四年父兄会

12月

校友会新規約作成、配布
期末考査終了後、校庭整理

12・22(土)大掃除

25(火)四年、補充授業(30日)

29(土)転入試験
御真影返還

1・2(水)四年の希望者に英語補習授業

15(火)補習科開設(3月)

3・5(火)職員消費組合の役員紹介と依頼

25(月)終業式

28(木)第四五回卒業式

29(金)小島校長、粕壁高等女学校長に
転出

30(土)第一四代校長福森治氏就任

ことを知ったのだった。

思いもしなかったことであつたので、悔しい思いが強くなったが、その後は複雑で放心の状態だった。解散して帰路にいたが、川越市の街中や、私の住んでいた人間川の街が、いやに静かであつたことが強く印象に残っている。その静寂さは日本のこれまでにないような大きな強い変動の日で、しかも精神的衝撃の大きい時だったので、大変奇妙に思われたのだった。
(長谷川 栄・高3)